

障害のある児童生徒の通常学期中における 平日と土曜の生活時間

遠藤理恵

(2006年10月5日受理)

Time Use of the Children with Disabilities on Weekday and Saturday during the Semester

Rie Endo

This study aims at clarifying time use of the children with disabilities in terms of the family types, the degree of necessities for independent skills of daily life, social contact and location. The data used in this study are based on time use survey of the children with disabilities in Hiroshima Prefecture on weekday and Saturday during the semester. It was found that mothers with the children with disabilities accompanied their children almost all day long except their school time, and the children spent a large amount of time with their family members and in their house. However, there was few opportunity to spend with friends of the same age. One of the important problems is how we provide time and space for the children with disabilities to spend with friends of the same age except for school time.

Key words: Time use, Children with disabilities, A five-day school week

キーワード：生活時間，障害のある子ども，学校週5日制

1. はじめに

障害のある子どもの日常生活をより豊かなものにしていくためには、個々の障害状態の改善だけではなく、より日常生活に即した家庭生活の経営という観点からの配慮や安全管理が必要である。家庭生活の経営とは、各家族成員の目的の達成と発達の保障、ひいては自己実現をめざすための人間活動の営みである。その営みについては、具体的には収入と支出の配分、労働力の配置、衣食住に関する生活技術、生活時間管理、疲労回復、健康管理、生活設計などを意思決定しつつ遂行していくことであるといえよう〔比較家族史学会、1996〕。本研究では、障害のある子どもの生活の質

(QOL: Quality of Life) を高めていくためにどのような生活支援が必要であるかを検討するために、上記活動の中でも生活時間に焦点をあて、時間使用の全般的傾向、家族類型による分析、対象児のサポートの必要性の程度からみた分析、一日24時間を一緒にすごした人と場所についての分析を行った。

これまでの生活時間調査では、国民の平均的な時間使用があつかわれてきたものが多勢を占めており、サンプル数の少ない個人・家族の問題の顕在化が困難であった。たとえば、障害のある者や家族介護にあたる者などの問題である〔Bittman M., et.al., 2003, 2004〕。特に、障害のある子どもの生活時間については、これまで殆ど調査されてきたことがなく、そのため障害のある子どもの時間の使い方に基づいたサポートのプランニングが省みられることが少なかったのではなからうか。先行研究においても、障害のある子どもに関する生活時間研究は数少ない〔久保、1975, 1980, 1984, 1992, 鈴木、1990, Edebol-Tysk K, 1988〕。しかも、こ

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：平田道憲（主任指導教員）、柴 静子、
岩重博文、船津守久、横田明子

れまでの先行研究では、筆者の調べた限りでは、主要な養育者である母親の生活時間のみに焦点があてられており、対象となる子ども自身の生活時間や家族類型による分析は行われていない。生活時間研究全般においては、家族類型による時間配分の相違についてこれまでも分析されてきているが、その殆どの調査対象は世帯内の夫と妻であり、世帯内の子ども、あるいは世帯内の親といった生活時間研究は殆ど見出されない[平田, 2004]。

わが国の今日の学校休業日については、学校週5日制における休日の親子の生活経営が大きな問題となっている。この問題については、月1回の学校週5日制が施行されて10年以上が経過した今日、地域における障害のある子どもの生活環境を改めて見直し検討する時期にさしかかっているのではなからうか。

本研究の目的は、①広島県の障害のある児童生徒の平日と土曜の一日24時間の時間使用の状況分析、②平日と土曜の生活時間を比較することにより、特に学校週5日制のもとでの家庭生活や地域生活における生活の質(QOL)を高めていくための一つの指針となる見解の探究、の二点である。

2. 方法

(1) 調査対象

広島県在住の障害のある児童生徒を対象とする生活時間調査を実施した。比較群である健常児の生活時間データは、総務省統計局が2001年に実施した社会生活基本調査の小学生・中学生の調査結果を使用した。なお、本研究で使用する「主養育者」という用語については、「障害のある子どもの日常生活、とりわけ家庭生活において、最も身近に身近の世話をを行っている養育者」のことで定義する。

(2) 調査期間

調査期間は、2004年11月から2005年10月までの11ヶ月間である。

(3) 手続き

障害児学級をもつ小学校および障害のある子どもをもつ親の会をととして調査を依頼し、主養育者である保護者に調査票を記入してもらった。通常学期中の平日と土曜の生活時間の記録および付随する質問紙への回答を得た。本調査における調査票記入者は、全員が対象児の母親であった。

(4) 回収率

配布数104部、うち有効回答数は平日も土曜も44部(42.3%)であった。

(5) 障害のある子どもの生活時間調査中分類表

生活時間については、表1に掲げた25項目の行動中分類別平均時間量を用いて分析した。総務省統計局の「社会生活基本調査」の生活行動の分類は、10歳以上の人が記録できるように作成されており、障害のある子どもの実態をとらえるためにはそのままの適用は困難である。子どもの生活の特徴が十分把握できるようにするために、「幼児とテレビに関する生活時間調査」[原, 1978]の項目を参考としながら、筆者が独自に作成したものを使用した。

項目1. 身の回りの用事、項目2. 食事、項目3. 睡眠、の3項目が大分類「生理的必要時間」にあたる。項目7. 組織的教育とは、大分類「学校教育」にあたる。項目8. ならい事、項目9. 自宅学習は、大分類「学校教育以外の学習」にあたり、項目10. から項目22. までの13項目が大分類の「遊び」にあたる。

表1 障害のある子どもの生活時間中分類表

大分類項目	中分類項目	
生理的 必要時間	1.	身の回りの用事
	2.	食事
	3.	睡眠
移動	4.	移動
	5.	付き添われて出かける活動
家事・手伝い	6.	家事・手伝い
学校教育	7.	組織的教育
学校教育 以外の学習	8.	ならい事
	9.	自宅学習
遊び	10.	会話・接触
	11.	社交・交際
	12.	休息
	13.	テレビ
	14.	読書
	15.	受容的感覚遊び
	16.	身体全体の遊び
	17.	特に手を使った遊び
	18.	特に頭を使った考える遊び
	19.	ごっこ遊び
	20.	おもちゃ遊び
	21.	音楽的遊び
	22.	その他の遊び
その他の 行動	23.	依存的態度
	24.	その他の行動
	25.	施設等の活用

3. 調査結果と考察

(1) 調査対象児の属性

調査対象児の属性は、表2のとおりである。小学生39人の所属については、障害児学級の低学年22人、障害児学級の高学年12人、養護学校の低学年4人、その他(通常学級)1人であった。中学生5人の所属につ

表2 調査対象児の属性

所属する教育機関 (人)				
小学生			中学生	合計
障害児学級	養護学校	その他	障害児学級	
低学年	高学年	低学年		
22	12	4	5	
性別 (人)				
男児		女児		合計
32		12		44
主養育者からみたサポートの必要性の程度 (人)				
最重度		5		
重度		12		
中度		5		
やや軽度		6		
軽度		12		
無回答		4		

注. 「最重度」「重度」「中度」「やや軽度」「軽度」の基準については、「子どもが自分自身の生活を処理し、年齢相応の家庭・学校・地域生活における様々な活動に参加するために必要とする他者からの支援の程度」について、身近に接する保護者（主養育者）からみた評価を5段階で回答してもらったものである。

いては、全員が障害児学級に在籍していた。

性別については、男児32人（72.7%）、女児12人（27.3%）であった。

主養育者からみた対象児の生活に関するサポートの必要性については、最もサポートを必要とする最重度が5人、重度が12人、中度が5人、やや軽度が6人、軽度が12人、無回答が4人であった。「サポートの必要性の程度」とは、ICF 国際生活機能分類：International Classification of Functioning, Disability and Health (WHO) [独立行政法人 国立特殊教育総合研究所・WHO, 2005, 障害者福祉研究会, 2002]に基づき、「障害」を生理学的な個人因子だけでなく、社会的観点から見た環境因子との複合的な相互関係のなかでとらえる表現である。

対象となった児童生徒の障害名については、重複している場合には複数回答で記入してもらった。障害の種類の内訳は、視覚障害3人、肢体不自由3人、病弱1人、知的障害40人であった。なお、本研究における障害の概念については、先にあげたICF 国際生活機能分類に基づいてとらえるため、対象児の診断名についての詳細な記述は行わない。

(2) 障害のある子どもと関わる主要な人的環境

障害のある子ども自身からみた同居している家族の続き柄による家族類型は、次の5分類である。

- 1) 両親・本人
- 2) 両親・本人・きょうだい1人
- 3) 両親・本人・きょうだい2人
- 4) 両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母
- 5) その他

なお、「その他」の家族類型の内容には、本稿では次の4種類の家族類型が含まれていた。すなわち、「母親・本人」「両親・本人・きょうだい3人」「母親・本人・同居の祖父または祖母・同居の叔父」「両親・本人・きょうだい1人・同居の祖父または祖母・同居の叔父」である。これら4種類の家族類型のデータについては、回答数がそれぞれ1件ずつであったため、プライバシーに関する配慮から個別のデータについては述べない。

まず同居している家族類型の各回答数をみると、障害のある子どもからみた続き柄が「両親・本人」の世帯は8件（18.2%）、「両親・本人・きょうだい1人」は17件（38.6%）、「両親・本人・きょうだい2人」は13件（29.5%）、「両親・本人・きょうだい1人・同居の祖父または祖母」は2件（4.5%）、「その他」は4件（9.1%）であった。

学校以外での生活における主要な人的資源との関連を示したものが表3である。

障害のある子どもの「養育および介助に関わる家族成員」については、いずれの家族類型をみても対象児からみた続き柄が「母親」の回答が最も多かった。

同居家族以外で、障害のある子どもの「養育および介助に関わっている地域の人」については、全体傾向をみると、ヘルパー13件（29.5%）、その他11件（25%）、近所に住む祖父母9件（20.5%）、施設の職員6件（13.6%）、学校の先生3件（6.8%）となっていた。なお、「その他」については、いずれの回答者も「遠くに住む祖父母」と回答していた。

家族および家族以外の支援者の中で、「最も主養育者のサポートとなっている人的資源」については、「同

表3 学校以外での生活における主要な人的資源 (人)

養育・介助に関わる家族成員 (複数回答)									
同居家族	祖父	祖母	父親	母親	きょうだい	その他			
合計	3	4	40	44	31	1			
養育・介助に関わる地域の人 (複数回答)									
地域の人	学校の先生	ヘルパー	施設の職員	近所の人	近所に住む祖父母	その他	いない		
合計	3	13	6	1	9	11	7		
最も主養育者のサポートとなっている人的資源									
人的資源	学校の先生	ヘルパー	施設の職員	近所の人	近所に住む祖父母	同居家族	その他	いない	無回答
合計	7	2	1	0	4	18	2	4	6

居家族」と「近所に住む祖父母」および「その他（遠くに住む祖父母）」の合計が24件（54.5%）と最も高くなっており、次いで「学校の先生」7件（15.9%）、「いない」が4件（9.1%）、「ヘルパーと施設の職員」が3件（6.8%）となり、親族あるいは対象児の日頃の様子を良く知っている者が、最も頼りとされていることがうかがわれた。

(3) 障害のある子どもの生活時間の特徴

①全体の特徴

表4 障害のある子どもの生活時間の特徴

(単位：分)

全体傾向	平日	土曜	
生理的必要時間	707	800	
家事・手伝い	8	23	
学校教育	411	17	
学校教育以外の学習	29	31	
遊 び(中分類13項目)	179	363	
移動とその他の行動	106	205	
土曜の方が長い行動	平日	土曜	土曜-平日
睡眠	530	602	72
付き添われて出かける活動	14	77	63
食事	80	109	29
家事・手伝い	8	23	15

広島県の障害のある児童生徒の一般的な生活時間結果を表4に示す。なお、本論文においては、600分（10時間）以上については分かりやすいように、「分」の横に（〇時間〇分：一日の〇%）の表記をした。

「生理的必要時間」は平日707分（11時間47分：一日の49.1%）、土曜800分（13時間20分：一日の55.6%）で、土曜の方が93分長く、「家事・手伝い時間」は平日8分、土曜23分で、土曜になると平日の約3倍近い時間、お手伝いに携わっていることが分かった。「学校教育」に関わる時間は、平日411分、土曜17分であった。「学校教育以外の学習」は、平日29分、土曜31分で土曜の方が3分長い。遊びについては、平日179分、土曜363分であった。「移動」と「その他の行動」の合計は、平日106分、土曜205分であった。これをみると、いずれも「学校教育」のない土曜の方が平均時間の長い行動が多いことが分かった。

そこで、土曜の方が長い行動に注目し、一つの目安として土曜の方が平日よりも15分以上長い中分類項目をとりあげると、睡眠（土曜-平日：72分）、「付き添われて出かける活動」（土曜-平日：63分）、「食事」（土曜-平日：29分）、「家事・手伝い」（土曜-平日：15分）となっていた。

②遊び行動の特徴

表5は、土曜が平日よりも活動の長い順にあげた中

表5 中分類「遊び」行動にみる土曜のほうが長い行動 (単位：分)

中分類項目	平日	土曜	土曜-平日
テレビ	57	121	64
その他の遊び	43	67	24
特に頭を使った考える遊び	4	20	16
特に手を使った遊び	10	26	16
身体全体の遊び	4	19	15
会話・接触	6	21	15

分類「遊び」行動である。

大分類「遊び」に含まれる中分類項目については、「音楽的遊び」を除いてすべて土曜の方が長く、その中で、平日より平均時間が15分以上長いのは、「テレビ（土曜-平日：64分）」、「その他の遊び」（土曜-平日：24分）、「特に頭を使った考える遊び」（土曜-平日：16分）と「特に手を使った遊び」（土曜-平日：16分）、「身体全体の遊び」（土曜-平日：15分）と「会話・接触」（土曜-平日：15分）という順になっていた。

③性別による比較

表6 性別による生活時間の比較

(単位：分)

	女兒		男児	
	平日	土曜	平日	土曜
生理的必要時間	711	836	706	787
家事・手伝い	13	28	7	22
学校教育	411	0	411	23
学校教育以外の学習	35	13	27	38
遊 び(中分類13項目)	165	343	184	371
移動とその他の行動	105	221	106	199

性別による比較では、「生理的必要時間」は平日は女兒が5分長いだけの差であったが、土曜には女兒の方が男児より49分長くなっていた。

「家事・手伝い」は平日・土曜ともに女兒の方が長い。

「学校教育」は、平日は男女とも同じ411分であったが、土曜には男児が23分となっていた。これは、土曜に登校日の男児が2人いたためであった。

「学校教育以外の学習」では、平日は女兒の方が8分長く、土曜は男児の方が25分長くなっていた。

「遊び」については、男児の方が女兒より長く、平日は19分、土曜は28分長くなっていた。

「移動」と「その他の行動」では、平日は男女の平均時間は1分しか違わないが、土曜には女兒の方が男児より22分長くなっていた。

④小学生と中学生の生活時間比較

次に、広島県の障害のある子どもの小学生・中学生の比較を表7に示した。「生理的必要時間」は、小学生では土曜は平日より114分長くなっていたが、中学生では殆ど変わりなかった。「学校教育以外の学習」は、

表7 小学生と中学生の生活時間比較

(単位：分)

大分類別にみる全体傾向	平日		土曜	
	小学生	中学生	小学生	中学生
生理的必要時間	703	729	817	728
学校教育以外の学習	29	28	26	54
移動	88	90	160	236
中分類項目における比較	平日		土曜	
	小学生	中学生	小学生	中学生
身の回りの用事	89	135	85	107
睡眠	537	501	621	516
家事・手伝い	8	11	25	17
自宅学習	17	28	17	38
遊び	187	143	381	283
付き添われて出かける活動	17	2	71	101

平日では小学生・中学生の差は1分しかないが、土曜になると小学生は3分減少して26分、一方で中学生は26分長くなって54分となっていた。「外出」時間も、平日は2分しか両群の差はないが、土曜になると小学生は3分減少して26分、一方で中学生は26分長くなって54分となっていた。「移動」時間も、平日は2分しか両群の差はないが、土曜になると小学生では72分長くなり160分、中学生では146分長くなり236分となっていた。

小学生・中学生の平日と土曜の生活時間で、特徴的な中分類項目をピックアップしたものが表7の「中分類項目における比較」である。「身の回りの用事」では、平日・土曜ともに中学生の方が長くなっていた。「睡眠」は、小学生では土曜は平日より84分長くなっていたが、中学生では土曜は平日より15分長くなっていた。「家事・手伝い」は小学生では土曜は17分長くなり、中学生では6分長くなっていた。「自宅学習」では、小学生は平日・土曜ともに17分であるが、中学生になると平日28分、土曜38分とのびていた。

「遊び」は、平日の小学生187分、中学生143分であるのに対し、土曜では小学生は194分のびて381分、中学生は140分のびて283分となっていた。しかし、調査用紙に記入された遊び内容をみると、家の中でのおもちゃ遊びかテレビが多く、この2つの活動の合計は平日68分、土曜139分であった（小学生・中学生を合わせた平均時間）。一方で、戸外で同年代の子どもたちと遊ぶといった遊び方は、土曜に1件あっただけであり平均時間では土曜3分、平日0分となっていた。「付き添われて出かける活動」では、小学生・中学生ともに土曜の方が長くなっていたが、特に平日の小学生では17分であったのが土曜には71分、中学生では平日2分が土曜には101分と非常に大きな差がみられた。

⑤ 健常児群との比較

広島県の障害のある児童生徒の生活時間の特徴をさ

表8 健常児群との比較

(単位：分)

小学生	障害のある子ども		健常児群	
	平日	土曜	平日	土曜
睡眠時間	537	621	533	558
身の回りの用事	89	85	66	61
家事・手伝い	8	25	5	9
自宅学習	17	17	40	33
休息	20	32	96	86
テレビと視聴覚行動	65	126	103	196
社交・交際	9	23	14	55
中学生	障害のある子ども		健常児群	
	平日	土曜	平日	土曜
睡眠時間	501	516	473	540
身の回りの用事	135	107	66	61
家事・手伝い	11	17	4	9
自宅学習	28	38	64	72
休息	2	21	96	108
テレビと視聴覚行動	34	126	97	181
社交・交際	34	0	10	33

注：健常児のデータは、総務省統計局「社会生活基本調査」(2001)による。

らにとらえるために、健常児群の生活時間との比較を行った。対象群の健常児の生活時間データについては、社会生活基本調査（総務省統計局、2001年）の調査結果を利用した。そのため、中分類項目に多少の違いがあり、双方のデータの厳密な比較はできないが、比較可能な項目のなかでも特に特徴的なものを表8にあげた。

「身の回りの用事」については、健常児群に対して、障害のある子どもの群では、小学生・中学生ともにいずれも長く、特に平日の中学生は、健常児群の中学生に比べて1時間以上長くなっていた。

「家事・手伝い」は、両群において土曜の方が長い。しかし、平日・土曜ともに障害のある子どもの小学生・中学生が長く携わっていることが分かった。障害のある子どもの「家事・手伝い」の具体的な内容については、「洗濯物をたたむ」「料理や配膳の手伝い」という活動が主な内容であった。障害のある子どもの群では、全員が「家事・手伝い」活動に参加できる状況ではないにもかかわらず、平均時間にみる健常児群との差は注目すべき点である。

「社交・交際」では、小学生の健常児群の土曜が最も長く55分、二番目に長いのは中学生の障害のある子どもの群の平日で34分、3番目に中学生の健常児群の土曜で33分、最も短いのが中学生の障害のある子どもの群の土曜で0分であった。しかし、調査用紙を見ると障害のある子どもの「社交・交際」の内容は、その殆どが祖父母や親戚といった親族内での訪問であり、友だちの家を訪問する、あるいは友だちが家に遊びに来るといった同年代の仲間での交流はごくわずかであるといった特徴がみられた。

(4) 障害のある子どもと関わる主要な人的環境と生活時間の関連

障害のある子どもが、一日24時間をどのような場所でどのような人と一緒にすごしたかについての分析を行った。「一緒にいた人」は、1つの行動につき3項目まで複数回答してもらった。

一日を「一緒にすごした人」の分類項目を以下に示す。

- 1) ひとりきり（ある閉じられた場所にひとりであった場合）
- 2) 母親と一緒に
- 3) 父親と一緒に
- 4) きょうだいと一緒に
- 5) その他の家族（同居の）と一緒に
- 6) 非同居の家族（例・祖父母など）と一緒に
- 7) 友だち・年長の子どものと一緒に
- 8) 友だちの母親と一緒に
- 9) 学校の先生と一緒に
- 10) ヘルパーなど親以外の介助者と一緒に
- 11) 公の場でひとり（連れはいるが、街頭、公共交通機関の中、映画館など見知らぬ人と一緒にいる場合）
- 12) その他

全体傾向をみると、まず「一緒にいた人」では、「友だち・年長の子どものと一緒に」、「学校の先生と一緒に」、「公の場でひとり」、「その他」の項目以外は、全て土曜の方が長くなっていった。最も長時間一緒にすごした人物は母親であった。また、土曜の方が長く一緒にすごした人物について平日との時間差の大きい順にみると、「母親と一緒に」、「きょうだいと一緒に」、「父親と一緒に」、「その他の家族（同居の）と一緒に」、「ヘルパーなど親以外の介助者と一緒に」、「ひとりきり」、「非同居の家族と一緒に」、の順となっていた。「友だち・年長の子どものと一緒に」については、学校以外の場で同年代の友だちと関わる機会はわずかな時間であり、これらの時間について記入された回答用紙をみると障害のある子どもの親の会の活動などにより準備された催しなどの機会が大半であった。

一日をすごした「場所」からみた生活時間については分類項目を以下に示す。

- 1) 自宅
- 2) 自宅近辺
- 3) 他人の家（近隣・親類・知人・友人などの家およびその周辺の街頭）
- 4) 通学先の学校・学童保育
- 5) 親が職業関係で訪問した先
- 6) 商店・各種サービス機関

- 7) 飲食店および娯楽・宿泊施設
- 8) スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設（ただし、観戦で行った場合は6に入る）
- 9) 学校に通学・下校
- 10) 親の職場
- 11) 療育・訓練施設
- 12) 移動および待ち時間
- 13) その他

「場所」については、「通学先の学校・学童保育」、「学校に通学・下校」、「親の職場」、「療育・訓練施設」以外は、全て土曜の方が時間が長くなっていった。特に、土曜に長くすごす場所は「自宅」、次いで「移動および待ち時間」、「商店・各種サービス機関」、「他人の家」、「スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設」、「飲食店および娯楽・宿泊施設」、「自宅近辺」という順になっていた。

① 家族類型にみる「一緒にいた人」の分析

表9は、「家族類型別生活時間：一緒にいた人」について示したものである。全ての群において、平日・土曜ともに母親と一緒にすごす時間が最長となっていた。平日・土曜ともに母親と最も長くすごしていたのは拡大家族群で、核家族群では同居家族構成員が少なくなるほど母親と一緒にすごす時間が長くなっていった。特に土曜は、「両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母」は1148分（19時間08分：一日の79.7%）、「両親・本人」は1121分（18時間41分：一日の77.8%）、「両親・本人・きょうだい1人」は1026分（17時間06分：一日の71.3%）、「両親・本人・きょうだい2人」では925分（15時間25分：一日の64.2%）という順で、土曜一日の大半を母親とともにすごしていた。

父親と一緒にすごす時間は、拡大家族では平日53分、土曜0分と核家族群より極端に少ない。

「きょうだいと一緒に」にすごす時間では、核家族群では1人きょうだいよりも2人きょうだいの方が対象児と一緒にすごす時間が長く、平日では112分、土曜は47分の差があった。

「その他の家族（同居の）と一緒に」と「非同居の家族と一緒に」は、いずれの家族類型においても、母親、父親、きょうだいに比べてすごす時間が少ない。

「同居家族以外の人との関わり」については、土曜においては、「友だち・年長の子どものと一緒に」および「学校の先生と一緒に」が激減している。土曜には全家族類型において若干ながらヘルパーを使用していたが、「ヘルパーなど親以外の介助者と一緒に」の時間が土曜に増加した群は、「両親・本人」と「両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母」の二群であった。

②家族類型にみる一日をすごした「場所」の分析

平日においては、どの家族類型も、最も長くすごしている場所が「自宅」で818分（13時間38分：一日の56.8%）から909分（15時間9分：一日の63.1%）の間であった。次に長くすごす場所は、「通学先の学校・学童保育」、「他人の家」、「親が職業関係で訪問した先」、「飲食店および娯楽・宿泊施設」、「その他」の順であった。「自宅の近辺」と「スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設」は、きょうだいのいる群においては12分から13分間活用がみられた。「商店・各種サービス機関」は、家族類型の人数が少ないほど増加しており、0分から17分までの間の活用時間であった。

土曜になると、最も顕著な増加を示す場所は「自宅」であり、「両親・本人・きょうだい2人」、「両親・本人・きょうだい1人」、「両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母」の順で、1086分（18時間6分：一日の75.4%）から1232分（20時間32分：一日の85.6%）の間の活用があった。「商店・各種サービス機関」と「飲食店および娯楽・宿泊施設」の利用時間の合計、そして「移動および待ち時間」は、家族類型の構成人数が少ないほど利用時間が長くなっていった。まず、「商店・各種サービス機関」と「飲食店および娯楽・宿泊施設」

の利用時間の合計時間を多い順にあげると、「両親・本人」は110分、「両親・本人・きょうだい1人」は79分、「両親・本人・きょうだい2人」は52分、「両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母」23分であった。同じく「移動および待ち時間」を長い順にあげると、「両親・本人」は129分、「両親・本人・きょうだい1人」は87分、「両親・本人・きょうだい2人」は70分、「両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母」38分であった。

また、平日にはみられなかった項目について、「他人の家」は、「両親・本人・きょうだい1人」96分、「両親・本人」45分の活動時間がみられた。

以上、家族類型にみる①「一緒にいた人」と②「場所」についてまとめる。

- ・家族類型全般において、「母親」が対象児と一緒に過ごす最長の人物であり、核家族群では家族構成員が少なくなるほど母親と一緒に過ごす時間が長くなっていった。
- ・父親と一緒に過ごす時間は、拡大家族群では平日・土曜の両日ともに核家族群より120分以上少ない。
- ・ヘルパーの使用については、土曜には全ての家族類型においての利用があるが、最短17分から最長195

表9 家族類型別生活時間：一緒にいた人（単位：分）

平日				
「一緒にいた人」の項目	家族類型			
	1	2	3	4
1.ひとりきり	165	122	160	38
2.母親と一緒に	793	707	675	878
3.父親と一緒に	377	261	205	53
4.きょうだいと一緒に	0	416	528	435
5.その他の家族(同居の)と一緒に	0	41	0	53
6.非同居の家族と一緒に	0	7	0	0
7.友だち・年長の子どもと一緒に	208	273	103	218
8.友だちの母親と一緒に	0	4	0	0
9.学校の先生と一緒に	401	419	421	435
10.ヘルパーなど親以外の介助者と一緒に	0	38	32	0
11.公の場でひとり	21	10	3	60
12.その他	8	8	9	45
土曜				
「一緒にいた人」の項目	家族類型			
	1	2	3	4
1.ひとりきり	171	153	216	23
2.母親と一緒に	1121	1026	925	1148
3.父親と一緒に	578	659	307	0
4.きょうだいと一緒に	0	713	760	960
5.その他の家族(同居の)と一緒に	0	23	0	330
6.非同居の家族と一緒に	56	19	3	0
7.友だち・年長の子どもと一緒に	0	14	16	135
8.友だちの母親と一緒に	0	7	16	38
9.学校の先生と一緒に	0	16	30	0
10.ヘルパーなど親以外の介助者と一緒に	49	28	17	195
11.公の場でひとり	13	3	7	0
12.その他	0	8	0	0

注. 家族類型の1～4は、以下の内容を示す。

1. 両親・本人, 2. 両親・本人・きょうだい1人, 3. 両親・本人・きょうだい2人, 4. 両親・本人・きょうだい1人・祖父または祖母

分までの間にあった。

- ・土曜には「自宅」で、一日の75.4%から85.6%の時間をすごしていた。
- ・「商店・各種サービス機関」と「移動および待ち時間」は、家族タイプの構成人数が少ないほど利用時間が長くなっていた。

③サポートの必要度別にみる「一緒にいた人」の分析
表10に「サポートの必要度別にみる生活時間：一緒にいた人」を示す。

全ての「サポートの必要度」の群において、平日・土曜ともに最も密接な関わりをもつのが項目2. 母親、項目3. 父親、項目4. きょうだいであった。

「母親と一緒に」にすごす時間は、平日では、長い順にサポートの必要度が「最重度」、「やや軽度」、「軽度」、「重度」、「中度」であるが、土曜には「最重度」、「重度」、「軽度」、「中度」、「やや軽度」となっていた。

「父親と一緒に」では、平日・土曜とも「中度」が最も長く、平日291分（母親とすごした時間の56.7%）、土曜756分（母親とすごした時間の84.6%）であった。他の群では、143分（母親とすごした時間の17.8%）から468分（母親とすごした時間の47.1%）までの間にあった。

「きょうだいと一緒に」の時間は、最重度の子どもが最も短く、平日72分、土曜147分、であった。

「その他の同居家族と一緒に」および「非同居の家族と一緒に」は、父親、母親、きょうだいと比べると非常に短く、特に最重度の子どもについては平日・土曜ともに0分であった。

家族以外での一緒にいた人をみると、平日は、「学校の先生と一緒に」が最も長く、次いで「友だち・年長の子どもと一緒に」となっているが、土曜にはこれらの人物との関わりはいずれの群も顕著に短くなってい

た。「ヘルパーなど親以外の介助者と一緒」の時間については、平日の「最重度」の子どもおよび土曜の「中度」の子どもは0分であったが、他は3分から48分の間での利用をしていた。

④サポートの必要度別にみる一日をすごした「場所」の分析

「自宅」と「自宅の周辺」については、土曜は「最重度」、「重度」、「中度」、「やや軽度」の群についてはサポートの必要度が高まるにつれて、すごす時間が長くなっていた。

どの群においても「自宅」ですごす時間が最も長い。特に「最重度」の子どもが「自宅」ですごす時間は、平日1014分（16時間54分：一日の70.4%）、土曜1317分（21時間57分：一日の91.5%）と、殆ど自宅以外に出かけてはいなかった。他の群については、長い順に平日は「軽度」、「やや軽度」、「重度」、「中度」で896分（14時間56分：一日の62.2%）から906分（15時間06分：一日の63.0%）の間にあった。土曜は、「軽度」1,165分（19時間25分：一日の80.9%）、「重度」1145分（19時間5分：一日の79.5%）、「中度」1086分（18時間6分：一日の75.0%）、「やや軽度」980分（16時間20分：一日の68.1%）となっていた。

「他人の家」は、平日は「軽度」の子どもが19分すごしているだけで他の群は0分であったが、土曜は、長い順に「やや軽度」140分、「重度」53分、「軽度」39分で、「中度」と「最重度」は0分であった。

「商店・各種サービス機関」と「飲食店および娯楽・宿泊施設」の利用時間の合計時間を多い順にあげると、「やや軽度」は108分、「軽度」は70分、「中度」と「重度」は51分、「最重度」45分であった。

「スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設」は、「重度」は83分、「軽度」は61分、「中度」は45分、「や

表10 サポートの必要度別にみる生活時間：一緒にいた人 (単位：分)

一緒にいた人	平日					土曜				
	最重度	重度	中度	やや軽度	軽度	最重度	重度	中度	やや軽度	軽度
1	168	223	156	45	144	216	268	60	136	131
2	855	613	513	805	716	1068	1009	894	743	994
3	150	239	291	143	240	426	349	756	383	468
4	72	350	432	485	306	147	724	681	389	551
5	0	110	0	0	14	0	101	0	27	55
6	0	1	0	0	10	0	33	0	10	19
7	93	198	177	310	204	0	23	42	18	0
8	0	0	0	0	6	0	6	42	14	0
9	342	434	462	378	428	6	0	132	37	0
10	0	36	18	3	36	12	48	0	17	46
11	0	4	0	8	34	18	0	15	11	0
12	0	9	0	18	16	0	11	0	6	0

注。「一緒にいた人」項目の1～9は、以下の内容を示す。

1. ひとりきり（ある閉じられた場所にひとりであった場合）
2. 母親と一緒に
3. 父親と一緒に
4. きょうだいと一緒に
5. その他の同居家族と一緒に
6. 非同居の家族と一緒に
7. 友だち・年長の子どもと一緒に
8. 友だちの母親と一緒に
9. 学校の先生と一緒に
10. ヘルパーなど親以外の介助者と一緒
11. 公の場でひとり
12. その他

や軽度」33分、「最重度」15分であった。

「療育・訓練施設」の利用はなかった。

「移動および待ち時間」は、平日は長い順に「やや軽度」、「最重度」、「重度」と「軽度」、「中度」が33分から9分の間にあり、土曜になると長い順に「やや軽度」、「中度」、「重度」、「軽度」が98分から88分の間で、「最重度」は短く30分であった。

以上、サポートの必要度別にみる③「一緒にいた人」と④「場所」についてまとめる。

- ・特に、「最重度」の子どもの場合には、平日も土曜も母親と過ごす時間が他の群と比べて長くなっていた。
- ・土曜における父親ときょうだいの接触時間の合計は、「最重度」の子どもの573分（9時間33分：一日の39.8%）であるが、他の4群は772分（12時間52分：一日の53.6%）から1437分（23時間57分：一日の99.8%）の間であった。
- ・土曜の「最重度」の子どもの過ごす場所は、9割以上の時間が「自宅」であった。
- ・自宅以外ですごした時間については、「やや軽度」の子どもの最も長いという、一日を過ごすために活用した項目の種類すなわちレパトリーも豊富であった。
- ・「最重度」の子どもの場合には、「一緒にすごした人」「場所」の双方において、一日を過ごすために活用した項目のレパトリーが他の群に比べて少なくなっていた。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的である、①「広島県の障害のある児童生徒の平日と土曜の一日24時間の時間使用の状況分析」について、見出された点は、以下のとおりである。

健常児群との比較においては、「家事・手伝い」では障害のある子どもの方が長くなっている。これは、障害児教育において、教育内容が日常生活で具体的かつ実践的な生活スキルとして役立つように授業の工夫がなされており、そのような学校教育における教育課程の成果が反映されたものと推測することができる。

「学校以外での生活における主要な人的資源」についての回答と生活時間調査における「一緒にすごした人」と「場所」の回答から、障害のある子どもの日常生活において緊密なかわりをもつ人物は母親であることが再認識できた。

全ての「家族類型」および子どもの「サポートの必要性の程度」において、最長の時間をともに過ごす母親が、生活時間以外の質問紙で「子どもの養育・介助にかかわっている」「最もサポートとなっている」と

回答した人的資源については、実際の生活時間データでは、母親よりもはるかに短時間しか関わっておらず、このことは学校生活以外の活動の場の殆どに母親が付き添って行動しているという現状が考えられた。

特に、最重度の子どもの場合には、家族内においても主養育者以外の家族が関わる時間が他の群よりも少ないという、一緒に過ごす人・場所の双方の分析においても、活動項目のレパトリーが少なかった。このことは活用できる人も場所も少ないという実情を示しており、主養育者がひとりて抱え込むかたちになっている状況が推測された。子どもの特性を熟知している母親以外に対応できる人も場所も殆ど見い出せない状況は、万が一母親が倒れた際には代替の人材やサービスを見出すことが困難であるといえる。

障害のある子どもが、土曜に過ごす場所は、自宅が多い。土曜には、生理的必要時間に次いで長いのが遊びの時間であったが、同年代の子どもたちと関わる時間は非常に少なかった。

土曜に3番目に長い、「移動・付き添われて出かける行動・その他の行動」に対応する場所をみると、「商店・各種サービス機関」と「移動および待ち時間」については、家族類型の構成人数が少ないほど利用時間が長くなっていた。

これらを受けて、本研究の目的②「特に学校週5日制のもとでの家庭生活や地域生活における生活の質(QOL)を高めていくための一つの指針となる見解の探究」については、以下の4点をあげる。

- ・ヘルパーや施設の職員については、主養育者の意識としては「サポートとなっている人的資源」としてあげられているにもかかわらず、実際の利用時間は殆どない。このことは、現実には主養育者の活用が難しい何らかの状況があるものと考えられ、実際に有効に活用できるようにするためのシステム等の改善の検討が必要である。
- ・主養育者は、子どもの養育・介助において、配偶者である父親を最も頼りとしているが、「中度」以外の子どもの群では、実際には殆どの場合、母親の半分以下の時間しかかかわっていない。父親が、もっと対象児と関わるには、どのようにしたらよいかを家族内でのコンセンサスと職業労働の条件からも改善していく必要がある。
- ・最重度の子どもの生活の質の向上のためには、主養育者が社会的生産活動（ペイドワークおよびアンペイドワーク）に携わるための、生理的・心理的な活力の回復および良好な健康状態の維持をどのように行っていくかについて、更なる研究が重要な課題となる。

・土曜に同年代の子どもたちと地域の中で関わって
いくことが現実問題として難しいことが、生活時間の
面からも浮き彫りにされた。障害のある子どもの親
の会などの主催する活動以外でも、このような場を
設けるにはどのようにしたら実現可能であるかを研
究していくことが、今後の課題である。

本研究は、広島県の障害のある児童・生徒の通常学
期中の平日と土曜の生活時間について調べたものであ
る。生活時間調査は、通常の質問紙調査とは異なり回
答者にかなりの負担をかけるため、本調査に協力いた
だいた調査対象児のデータは数少ないものとなった。
しかし、これまで障害のある子どもの生活時間につい
て調査を行った研究はみられないため、生活時間研究
における研究の蓄積の一つとなると同時に、数多くの
障害のある子どもに関する生活支援の調査結果に対し
ても、時間使用という面からの裏づけを与えることが
できたと考えている。

【引用・参考文献】

- 安達勇作・竹内絹恵・吉村敬子, 「学校週5日制の養
護学校における問題点について」, 『富山大学教育学
部紀要 A (文科系)』, No.48, 1996年, pp.85-98
- Bittman M., Kimberly F., Trish H., Cathy T.: 'Using
time diaries to locate hidden carers of the elderly
and people with disabilities.' International Associa-
tion for Time Use Research Conference, (2003)
- Bittman M., Fast J., Fisher K., Thomas C.: 'Making
the invisible visible: the life and time(s) of informal
caregiver.' Family Time, pp.69-89 (2004)
- 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所・WHO 編著,
『ICF (国際生活機能分類) 活用の試み - 障害のある
子どもの支援を中心に-』, ジーアス教育新社,
2005年
- Edebol-Tysk K.: Spastic Tetraplegic Cerebral Palsy.
Epidemiology and Care Load. Department of
Paediatrics II, University of Gothenburg, Sweden,
(1988)
- 原芳男, 「幼児の生活とテレビ視聴 ~ 都市高層団地
における幼児の生活時間調査をとおして~」, 幼児
教育プログラム開発研究会, 『放送のための新しい
幼児番組の開発』 放送文化基金, 1979, pp. 27-81.
- 比較家族史学会, 『事典 家族』, 弘文堂, 1996年,
pp.217
- 平田道憲, 「家族成員のアンペイドワーク時間」『広
島大学大学院教育学研究科紀要』, 第二部, 第53号,
2005年, pp.385-391
- 久保絃章, 「自閉症児をもつ母親の「大変さ」につい
て-母親の生活時間調査と面接から-」, 『四国学院
大学創立25周年記念論文集』, 1975年, pp.505-530
- 久保絃章, 「自閉症児をもつ母親の生活状況と意識
-岡山県における実態調査から-」, 『四国学院大学
論集』, 47, 1980年, pp.83-106
- 久保絃章, 「自閉症青年をもつ母親の生活と意識-香
川県における10年目の追跡調査-」, 『四国学院大学
論集』, 58, 1984年, pp.139-170
- 久保絃章, 「自閉症青年をもつ母親の生活と意識に関
する研究-香川県における20年後の追跡調査-」,
『研究助成論文集 (障害児療育関連分野)』, 28,
1992年, pp.43-50
- 真木綾子, 「障害を持つ児童生徒に及ぼす学校週5日
制の影響に関する研究」, 広島大学教育学部卒業論
文, 1996年
- 三木安正, 「新版 S-M 社会生活能力検査 手引き」日
本文化科学社, 1980年
- 総務省統計局, 『平成13年社会生活基本調査報告』第
一卷 (その1), 日本統計協会, 2003年
- 鈴木文晴, 「在宅心身障害児, 特に重症心身障害児の
家族が児の介護に費やす時間的負担」, 『安田生命社
会事業団研究助成論文集 (障害児関連分野)』, 第26
号 No.1, 1990年, pp.73-78
- 障害者福祉研究会, 『ICF 国際生活機能分類 - 国際障
害分類改訂版-』, 中央法規出版, 2002年
- 渡辺信一・野波千代・海塚敏郎・南出好史, 「学校週
5日制における余暇利用に関する調査研究 - 福岡
県・熊本県の現状と問題点-」, 『特殊教育研究』,
38(2), 2000年, pp.73-82

【謝 辞】

本調査研究を行うにあたり、ご協力くださった広島
県の障害のある子どもの親の会の方々、現場の先生方、
福祉現場の職員の方々に深く感謝と御礼を申し上げま
す。